

地域生活支援分科会報告

地域生活部会長 安間 孝明

今年度より地域生活支援部会を担当させていただくことになりました安間です。ご存知のように、当部会は長年、内田さんが率いてくださり、非常に高度な内容に取り組んでこられました。私では力不足かと存じますが、精一杯務めさせていただきます。部会員には、発表経験豊富な大橋さん、賛助会員として参加いただいている相談支援事業所の鈴木さん、そして東部のベテランである小野さんという心強い布陣で当たらせていただきます。

今回の部会では、3名の発表者がそれぞれの視点から「地域で暮らしにくさを感じる人々への支援」について発表しました。内容の詳細は小野さんがまとめてくださるため割愛しますが、私から3氏の報告への感想を述べさせていただきます。

大橋さんの発表について

大橋さんは、問題行動は個人の問題だけでなく、施設特有の文化や専門性の追求が行き過ぎた結果として生じる側面があると指摘し、環境側からのアプローチの重要性を強調されました。漢方の「母子同腹」という考え方を引用し、支援対象者だけでなく、支援者や法人の文化も共に変化する必要があると述べられたのが印象的でした。

また、入所施設を閉鎖し、利用者が自由に過ごせる新しいグループホームの建設計画を披露されました。画一的な日課を廃し、旅行や外部交流、アーティストとの共同作業を取り入れるなど、非常に興味深い内容でした。西部地区の「レッツ」さんとも深い交流がある大橋さんの大胆な試みは、同団体からの刺激も相まって、良い相乗効果を生んでいると感じました。

安間（私）の発表について

私からは、触法障害者の支援に焦点を当ててお話ししました。自身の経験から、従来の施設が画一的な生活を強いる「刑務所」のようだと感じたことが活動の原点にあります。静岡城北刑務所の見学会で、社会福祉士の方から「受刑者の約6割がIQ70以下である」と聞き、大きな衝撃を受けました。

また、性的被害を受けた方の支援を通じ、社会の歪みが触法障害者を生み出しているのではないかとの思いを強くしました。私たち福祉関係者が彼らを受け止めなければならないと痛感しています。多くの失敗を経て「人間が人間を変えることはできない」という結論に至り、現在は「人を変えよう」とするのではなく「共にいる」姿勢を重視しています。現在はグネットワークの高木先生や事務局の鈴木さんの協力を得て、利用者が「愛されている」と感じられる「ミライカフェ」という場を運営し、受容的な空気の中で内面を語り始める支援を始めたところですよ。

鈴木さんの発表について

鈴木さんは相談支援の立場から、利用者の「望む生活」を深く理解し、必要な資源（人、金、住まい、制度）を確認しながら支援計画を作成する役割について説明されました。重度行動障害のある20代男性の事例では、25人以上のチームで詳細な情報共有を行い、本人の意向を推察しながら柔軟に支援している様子を紹介されました。緊急時対応や親の高齢化、意思決定の遅れといった課題を通じ、支援の難しさと重要性を提示してくださいました。

立場の違う3名による発表は、それぞれに特徴があり、地域生活支援部会に相応しい内容であったと自負しております。このような機会をいただけたことに感謝いたします。「静岡県作業所連合会・わ」という、こうした話を真摯に聞き合える仲間がいることは大きな励みです。協力してくれたお二人に、心から感謝申し上げます。